

「いちげつさんしゅう
二月三舟」を

思つ

鈴木 美恵子

『一月三舟』は仏教で使われる言葉です。一つの月を、北に行く舟から見ると北へ行くように見え、南に行く舟から見ると南に行くように見え、止まっている舟から見ると止まっているように見えます。一つのことそれぞれに異なって受け取ることができ、いろいろな見方をする事ができる教えとして使われています。(注一)

この言葉は、私が密かに尊敬しているIさんという方が、十一年以上に渡って随筆を連載され、それをまとめた本の題名でもある。エッセイの中には、興味深い話や様々な場面での出来事が書かれているのだが、それに対する作者の捉え方こそ「一月三舟」

である。

Iさんは的を得たコメントを正直にストリートに書くし、厳しい意見も主張する。時には痛烈な皮肉を交える文章もあるが、それもユーモアが有りユニークである。奥底には愛情さえも感じられる。更に、熱意のある文章にどンドン引き込まれてしまうのだ。正直で信念のある人柄を感じる。気骨のある人、と言った方が良いだろうか。

私の場合、不条理な出来事を目にした耳にして不快な時は、このエッセイを読むことでモヤモヤした気分がスッキリする。と同時に、ボンヤリ生きていては人生がもつたない、と身の引き締まる思いがするのである。

Iさんに初めてお目にかかったのは、出雲市に関連したパーティー会場であった。ふる里湖陵出身者が旧交を温める盛大な会である。

会の発起人であり当時の会長さんのご好意で、私は招待して頂いた。パーティーに参加できるという事で、ワクワクと心躍らせながら、会場となるホテルへ

向かったものだった。和服姿やドレス姿の女性会員、スーツ姿の男性会員達が、あちらのグループこちらのグループで和気あいあいと賑やかに談笑していた。会場の一角では物産品が販売されて、各々お土産用にと買い求めている。

元会長の方が出雲弁を教えてくださいました。「だんだん(ありがと)」と「ばんじまして(夕方と夜の間に使う挨拶言葉)」「けんね」。耳慣れない言葉ばかりで、何度聞いてもこれしか覚えられなかったが、味わいのある響きである。日本舞踊、安来節、出雲出身のプロ歌手による歌謡ショーに抽選会と大変な盛り上がりである。

宴たけなわの頃、横から声をかけて下さる方がいた。長身で風格があり、学者のような人だった。二言三言言葉を交わした後、その方が名刺を下された。そこには、米国、中国、韓国、日本における各大学の客員教授特任教授の肩書、更に海外で活躍された経歴などが載っていた。

この方が以前から聞き及んでいたIさんなのかと、一瞬ピンと

背筋が伸びた。お顔を見つめたまま、私は何かを訴えたのではないだろうか。頷きながら黙って聞いておられたIさんは、「貴女にはこちらの名刺も差し上げましょう」と二枚目の名刺を下された。そこには「総理大臣特使I」とあった。それから両手を後ろに組んでニコニコしながら、「楽しいければ良いのです」と言い残して去って行かれた。この僅かな時が、私には忘れられない一場面となったのである。

Iさんの生まれは大阪であるが、小学校一年でお父様を亡くされ、戦火から逃れるためにお母様のふる里、島根県出雲市湖陵町へ転居する。湖陵中学校、県立出雲高校を経て東京大学法学部へ進学する。大学卒業後、日興証券入社。ニューヨーク、ロンドン、そしてパリ支店長と海外で活躍。後に世界最大の投資銀行メリル・リンチ・ジャパンの社長、会長を経て米国本社の上席副社長に就任。しかし1989年、出雲市からの熱心な要請に応じて同社を退社し、同年出雲市長に就任。

「行政は最大のサービス産業」というスローガンのもと、次々と画期的な新しい施策を実現し、出雲市は優れた企業として、日本能率協会マーケティング最優秀賞を受賞。また、世界で初めて「樹医制度」も創設。三大駅伝といわれるうちの二つ、出雲駅伝が開催されるようになったのも、Iさんの市長時代である。豊かな国際経験と知識が評価され、日本に限らず外国の大学での客員教授就任など、多方面で活躍。1998年、ベストドレッサー賞受賞、2013年、旭日重光章を受賞。

メリル・リンチ上席副社長に就任してからは、一週間おきにニューヨークから東京へ、東京からニューヨークへと通勤時間13時間、5年間の長距離飛行機通勤を続け、この間に飛行機の中で100曲近い歌を覚えてしまったという。まさに合理的かつ柔軟な発想のアイディアマンであり、努力家である。

ここで、市長選の準備のために出雲へ帰った時のエピソードを紹介しよう。

ある日、選挙の前にIさんの話を聞いてみようかと老人会が開かれた。そこで話を始めようとしたとき「よう帰ってこすなつたのー」と涙ながらにすっかり手を握ってくれたおじいさんとおばあさんがいた。

ある町議さんは「Iはいつか必ずふる里へ帰ってきてくれる。その日を待っていていよう」と固く信じて待っていてくれた。ふる里へ帰って市長になろう、と強く思った出来事であった。

英語圏で活躍されていたIさんは、地元の大先輩から選挙演説に関してアドバイスを受けた。

「あんたは演説の時は英語を使ったらいいけんよ。英語を使うたんびに票が逃げていくけんね」(注2)

Iさんは施政方針演説の時も日本語にこだわり、4ヶ所以外全部日本語で通した。

2015年7月、「おばあさんのしんぶん」という絵本が講談社から発売された。これは日本新聞協会推奨、「新聞配達に関するエッセーコンテスト」があり、大学生社会人部門で最優秀作品になったものである。今では学

校の道徳の教材として使われているらしい。実はこの作者がIさんであり、ご自身の子供の頃の実話に基づいた内容である。

小さい頃に父を亡くしたIの家族は、母のふる里出雲へ転居した。Iは忙しい母を一生懸命手伝った。5年生になると、朝の牛乳配達に加え、新聞配達もさせてもらった。日本海の海沿いの町での新聞配達はつらい仕事であったが、配達したおじいさんの家で、新聞を毎日読ませてもらうのがとても楽しみであった。やがておじいさんは亡くなったが、残されたおばあさんは、今まで通り読みに来るよう促し、しっかりと勉強して将来はりっぱな人になれるよう励ましてくれた。

泣きじゃくるIの姿が目につく。Iは大人になっても、誰にも新聞配達を経験を語ることはなかった。ただ大切な思い出として、心の中に感謝の気持ちをもち続けていた。今でも新聞を開く時、心の中でおばあさんへの感謝の言葉をつぶやくのだった。

「生きる糧として、人生の指針として、新聞とその配達に関わる全ての人に感謝をしている。」(注4)と謝辞を寄せている。

この絵本からはIの真つ直ぐな気持ち、前向きに頑張る姿、家族愛、人の気持ちのやさしさがしみじみと伝わってくる。小学校から高校まで母を助けて畑仕事を手伝ったI。その頃の苦労のおかげで世界のどこに住んでも八百屋の前を通る楽しみが出来たという。戦後の日本は大変な生活が続く、皆苦しい日々を送っていた。そのつらかった自分たちの姿と重なるからこそ、余計心が揺さぶられるのだ。私は何度読んでも、鼻の奥がツーンとして涙がにじんでくるのである。

Iさんは、ビジネススマンとして世界を飛び回っていた。市長として行政に携わった。国会議員として活躍され、日本の姿をよく見ていた。教授として各国の生徒たちに講義する。どれもIさんの姿であり、素晴らしいと思う。ただ、人によっては捉え方が変わり評価も変わるだろう。これも「一月三舟」ではないだろうか。

思い返せば、あのパーティーに行かなければ、私はIさんにも目にかかることはなかった。心躍らせながら喜んでパーティーに行ったから、そこに招待して下さる方がいたから、その日にIさんが出席していらっしやうから。見えない糸が動いたのか。浜辺にさざ波が打ち寄せるように、自分に影響を与えてくれる素晴らしい人に出会えることは幸せである。目に見える風景も変わり本当に楽しい。

現在シカゴにお住いのIさんは、お盆の時期に墓参りのため日本に帰国される。そして父との思い出の甲子園へ、高校野球

の準々決勝と準決勝を観に行くのが楽しみだそう。同窓会も必ず出席するという。今でも周りの人たちへの感謝の気持ちを忘れず、家族、友人、ふるさと、年寄りを大切にするIさんが、アメリカと日本の空の下、いつまでもお元気で活躍されるよう、心より願っている。

最後になったが、Iさんとは出雲市出身の岩國哲人（いわくにてつんど）さんのことである。

注

- (1) 岩國哲人「一月三舟 XII」株式会社今井書店、2009、カバー袖部分
- (2) 岩國哲人「一月三舟 XII」株式会社今井書店、2009、151P
- (3) 岩國哲人「おばあさんのしんぶん」株式会社講談社、2015
- (4) 岩國哲人「おばあさんのしんぶん」株式会社講談社、2015 奥付部分

引用・参考文献

「一月三舟 XII」岩國哲人著 株式会社今井書店

「おばあさんのしんぶん」岩國哲人著 株式会社講談社

1500人ほどといわれた人口は1681年には5万3000

